

Title	哲学と質的研究 : 現象学的な質的研究の役割と位置づけについて
Author(s)	村上, 靖彦
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2019, 45, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71830
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

哲学と質的研究
——現象学的な質的研究の役割と位置づけについて

村 上 靖 彦

目 次

- 序 哲学に惹かれる実践者と実践現場に惹かれる哲学研究者
1. 見え方の産出としての哲学
 2. 質的研究にとっての哲学
 3. 意味の幾何学

哲学と質的研究
——現象学的な質的研究の役割と位置づけについて

村上靖彦

序 哲学に惹かれる実践者と実践現場に惹かれる哲学研究者

「……先生たちの監督を離れてもいい年齢に達するやいなや、私は書物による学問 *l'étude des lettres* を全くやめてしまった。そうして私自身のうちにか、あるいは世界という大きな書物 *le grand livre du monde* のうちに見出されるであろう学問のほかは、どのような学問にしるものはや求めまいと決心し……」(デカルト『方法序説』第一部)

現象学的な質的研究と呼ばれる分野がある¹⁾。医療現場や芸術の実践を医療者の視点、患者の視点、あるいは芸術家の視点からどのように経験が組み立てられているのかを描き、そしてとりわけ彼らが自分でも意識しきれていない経験の背景にあるスタイルを描き出す。現象学的な質的研究は、経験科学がデータの個別性とデータに内在した観点で記述しようとするときに生まれる極限の姿である。実践者が実践現場で付きあたる切実な問いが、彼らの個別的な経験のひだにかかわるとき、それは量的研究で捉えきれないだけでなく、GTA(Grazer&Strauss 1967)のような統計と折衷した質的研究の方法論でも考え抜くことができないと感じるようだ。こうして研究を志した実践者たちは現象学へと導かれている。

ところで私自身は哲学が出自でありながら医療現場での研究を続けると同時に、「哲学とは何か」という問いに取り憑かれ続けている²⁾。なぜかというと自分が教育を受けて身につけた学問が、いざ研究者になってみると社会にとって意味を持たないことに若干の疑問を感じ始めたとき、この問いを考えざるをえなかったからだ³⁾。私にこの問いを立てる能力があるかどうかは分からないが、ともあれ問いを立てることを強いられているように感じる。少なくともこのような問いが、テキストの歴史研究から医療現場での質的研究へと私を導いたと言える。研究を志した実践者たちと、実践へと惹きつけられた研究者たちの交点で現象学的な質的研究は成立している。

現代の日本社会は、厚い学問の伝統を疑う必要がないヨーロッパとは大きく状況が異なる。日本社会では、哲学という学問分野の存在意義を感じる市民はほとんどいないであろう。加えて、文献の歴史研究が哲学そのものになりえないことが、多くの研究者の

あいだで共有される認識となりつつある。日本で哲学研究を行おうとしたとしても、「何をすれば、どのようにすれば哲学研究は成り立つのか？」という問いが残る。研究者は誰であっても自分が生きている世界に対して何らかの直接のかかわりを求められている。

今の日本社会において哲学研究はいかなるものでありうるであろうか。あるいは逆に、実践現場出身の研究者はなぜ哲学とりわけ現象学に惹きつけられるのか、本稿はこの二つの問いに導かれる形で、現在私の仲間たちが取り組んでいる「現象学的な質的研究」の位置づけと意味付けを明らかにすることを目的としている。私の仲間たちは、医療・福祉や芸術などさまざまな実践分野へと入り込みつつ、哲学と呼びながら言葉を紡ぎ出し世界を記述しようとしている。今までも何度か方法論について議論しているが（村上 2013、村上 2016b、村上 2017b）、今回は少し広い社会的な文脈のなかで現象学的な質的研究の営みの位置づけと意味付けをここでは考えていきたい。

1. 見え方の産出としての哲学

哲学の伝達

まず第一節では哲学をめぐる状況を略述したい。

哲学には、哲学史という名のもとにまとめられるある種の伝統の集積であるという側面はたしかにある。ソクラテス、プラトン、アリストテレス、プロティノス、アウグスティヌス、デカルト、カント…とまだまだ増やすことはできるが、無際限に増えるわけではない何十人かの固有名詞によって（西欧）哲学史は成り立っている。もっと言うと、プラトンとアリストテレスに由来する概念を引き継ぎつつ、新たに概念を加えていくという仕方では西欧哲学史は出来上がってきた。概念の歴史と哲学者が残したテキストの伝統を無視することはできないように思われる。哲学書を読まずして哲学を行うことは不可能である。そして自己流で読めばよいわけではなく、なんらかの従うべき作法はたしかにある。

問題はここからはじまる。たしかに古典を参照することでしか「哲学」はできそうにないのだが、にもかかわらず、かねて哲学系の学会誌で行われているように、哲学者のテキストを詳細に調べて論文を書いたとしても、その書き手は「哲学者」にはなれないであろうし、「哲学」をしたことにもならない。その人は「哲学研究者」であって「哲学者」ではない。かといって伝統を参照することなく自分の考えを語ったとしても、それは少なくとも私が意図する意味での哲学ではない。何をすると哲学をしたことになるのかはやはり不明なままである。しかも、他の学問においては大学で学ぶことで「物理学者」「歴史学者」「経済学者」になれるのに、「哲学者」だけは大学教育で再生産することができないのだ。哲学を学んで、哲学を研究しても、哲学をできるわけではない。

見え方の産出としての哲学

それでは何を行ったら哲学をしたことになるのか。例えばドゥルーズとガタリは、「諸概念」を産出することとして哲学を定義した (Deleuze&Guattari 1990, 8)。この定義はよく知られているが、本稿の目的にとって大事なものは、諸概念の産出は「内在平面」と呼ばれる一つの世界の産出とセットであるという彼らの主張である。内在平面とは諸概念の布置によって新たな組み立てで示された世界である。一見すると座標を持たないカオスである私たちの現実に対して、なんらかのしかたで方向性を与え、それによって居住可能なものにするのが哲学（と芸術と科学）の役割だ、というのがドゥルーズとガタリの主張であった。私自身は概念の産出よりも、内在平面の産出に力点をおいて理解している。

私たちが行っている現象学的な質的研究を例に取る。当事者が抱える困難やそれを支える支援者による実践は、それぞれ独自の経験の平面を形作る。現象学においてその設計図を抽出したとき、そこにおいて実践が展開する内在平面を描いたことになる⁴⁾。私自身は看護実践を研究することで、死に直面する人、病や障害に直面する人が、どのように行為し、コミュニケーションをとっていくのか、支援者から見た世界の姿とそれを貫く内的なロジックを描いてきた。

看護師は私たちの身の回りにいる存在であるが、彼らから見える世界と人間の姿は、実は非医療者とは大きく違う。例えば言葉を話すことも自ら動くこともできない患者の意思を汲み取ろうと神経を集中するとき初めて見えてくるコミュニケーションの形がある。彼らの日々の実践はこのようなコミュニケーションへの努力を軸にして組み立てられていることがある。あるいは死にゆく人とその家族との関わりは、日常生活におけるコミュニケーションとは異なる姿を取る。私はこのようなコミュニケーションと実践の姿を構造として描く努力をしてきた。このとき現場で使われた言葉やインタビューで登場した言葉を大事にするがゆえに、ドゥルーズとガタリの主張とは異なって新たな概念を産出する必要は必ずしもない。むしろ一人ひとりの実践者が用いる日常の言葉遣いが哲学的な布置のなかで概念という重みを持つことになる。

本稿での提案はドゥルーズ&ガタリを引き受けつつ彼らよりもかなり素朴なものである。「哲学は〈世界の見え方〉を産出する学問である」という定義を仮に立てたい。大哲学者と呼ばれてきた人たちに共通するのは、伝統に由来する基本概念と問いの継承だけでない。むしろ大事なものは、世界の見え方をそのつど刷新するという活動だ。新たに哲学者が登場することで異なる世界の見え方が提案され、後戻りできない仕方で見え方が変化する。ただしこの場合の「世界の見え方」は、ドイツ観念論の哲学者たちが提示した思弁的かつ形而上学的な「世界観 *Weltanschauung*」に限られない。一人ひとりの個別の実践のなかにすでに潜んでいる世界の見え方が、そのつど私たちの視野を更新していくであろう。現象学的な質的研究の場合はそれをさまざまな実践現場に求める。

ベルクソンの言葉を引いてみよう。

コローやターナーの絵を前にして私たちが感じていることを、もっと深く掘り下げてみましょう。そうすればきっとわかりますが、私たちが彼らの絵を受け入れて感嘆するのは、彼らの絵の示すものの何ほどかを、私がすでに見たことがあるからです。しかし、私たちはそれを見ていたのですが、それに気が付かなかったのです。[…] 画家はそうしたなかから一つの光景を切り離し、カンヴァスの上にしっかりと固定させたのです、それ以後、私たちは画家自身が見たものを実在のなかに認めないわけにはいかなくなるのです。(Bergson 1938, 150/ 邦訳 214)

絵画について語ったこのベルクソンの言葉は「コロー」や「ターナー」を例えば「スピノザ」や「ベルクソン」と入れ替えてみると、そのまま哲学者について語ったものだということが分かるだろう⁵⁾。哲学者の登場によって世界の見え方ががらりと変わるが、しかし確かに以前から私たちの目にはそのように世界が見えてもいたと納得するような仕方で、哲学者は視野を変更する。対話を通して真理を探求したソクラテスにしろ、プラトンのイデア論にしろ、デカルトの誇張懐疑にしろ、スピノザの神＝自然にしろ、カントの『批判』にしろ、彼らの登場を境として世界の見え方はそのつど大きく変わったが、それは昔から世界はそうだったと思わせるようなものでもある⁶⁾。

世界の見え方の産出の例——デカルトからスピノザへ

哲学者であれば誰でも良いのだが、世界の見え方を刷新する例としてデカルトからスピノザへの展開を例に挙げてみる。もちろんここでスピノザの哲学を逐一取り上げることはできない。さしあたり神＝自然という概念（つまり神は、世界から超越した外部の存在者・原因ではなく、世界全体そのものであり自分自身の原因であるようなものだという『エチカ』冒頭に登場する概念）を念頭に置いてみよう。神の位置はデカルトとスピノザで大きく変化した。スピノザは、『デカルトの哲学原理』という当時としては珍しい他の哲学者についての入門書をものしたことで知られている。彼はデカルトから大きな影響を受けたのだが、同時にデカルトとはまったく異なる神を設定し、全く異なった世界の見え方を提案した。

「我思う故に我あり」と書いたデカルトの哲学は、「私」が存在することを出発点とする。私の存在を支える根拠として、世界から超越した外部にある神が想定される。人間の認識を限りなく超えて無限として、そして世界のあらゆる実在者よりも優勝的に実在する超越者としてデカルトは神＝無限を考えている (Descartes 1967, 433)。世界を超越する神によって世界は創造され、その存在を保証されている。キリスト教神学からデカルトに至るまで、神は世界から超越した存在であり、世界を創造し、人類を審判する存在

であった。このような神は、世界を超越して外部にある神であり、人間の能力では認識し得ないブラックボックスである。このような神＝無限を想定することは、プラトン以来そしてさらにさかのぼってユダヤ教の神以来、西欧の当然の前提となっていた。

ところがスピノザはこれとは全く異なる神の概念を提案することで、同時に異なる世界の見方を提示した。スピノザは「私」から出発しない。世界全体が神そのものであるという主張から出発する。「私」は世界（自己原因＝神＝自然）の様態として二次的に出現するものである。神あるいは無限とは、私自身もその一部である世界の全体であり、世界が無限である限りにおいて神は無限の絶対者である（スピノザ、『エチカ』、第1部）。世界全体がそのまま神なのだから、世界の外部などというものはスピノザによると存在しないのである。そしてスピノザのラディカルさは、単に無神論であるだけでなく、外部が存在しない世界についての統一的な理論を作り上げたことである。スピノザ以降、スピノザが提案した「外部のない世界」の呪縛を逃れることはもはや不可能になった。スピノザの提案した世界は、唯物論的な近現代の自然科学の視点を先取りすることになる。

#リアルなものへの嗅覚

世界の見え方の刷新はつまり或る方向性を持つ。世界の見え方を創造したとして、それはリアルな世界を見る見え方でないといけないということだ。新たな見え方を創造することももちろん法外な営みだが、ただ単に新奇であればよいわけではない。新たな世界の見え方を産出せざるをえなくする要請がある。その要請の一つが、旧来の哲学がそのつど人々が生きている世界にフィットしなくなること、違和感を生むことであろう。デカルトやスピノザの哲学は現代の読者にもインパクトを与え続けるが、しかし彼らが生きていた時代とは異なる条件のもとで私たちは生きている。それゆえ私たちが産出するものは必然的に彼らとは異なる内容、異なる形式になる。哲学者と言われる人間は、全員自分が生きた状況へと応答する形で自らの哲学を生み出し続けている。哲学に限らずあらゆる学問は、そのときどきの社会状況、技術の展開、文化的な特異性に応答している。過去の大哲学者たちが生み出した世界の見え方は、つねに私たちに大きな刺激を与え続けるが、しかし同時にいま私たちが生きている世界とはどうしてもずれが残ってしまう。このずれが新たな哲学の産出を要請しているのだ。

『方法叙説』(1637)でのデカルトは、書物を捨てて「世界という大きな書物 *le grand livre du monde*」に直面することを選んだ。このデカルトの決意をもう一度真剣に考えてもよいのではないだろうか。自分が住んでいるリアルな世界から生じうるインパクトのもとで、世界に応答しようとする営みとしてしか哲学は可能ではない。リアルな現場から概念を作り出そうとする技法の一つである質的研究と哲学との交差は、それゆえに哲学の伝統に則ったものであると言える⁷⁾。そしてある時代にとってリアルなものを探し出す嗅覚は哲学の営みの一部である（そしてこれは他の学問にとっても同じ事情である）。

この嗅覚を失うと哲学あるいは学問はどれもその力を失う。デカルトの誇張懷疑における疑えない確かなものへ向けての問い、カントにおける認識の限界設定の問い、フッサールにおける自明性への問い、これらの問いはすべてリアルなものの在り処を探し出そうとしている。

それではリアルなものとは何か。おおざっぱには、まだ言葉として分節はされていないが、当事者や実践者が巻き込まれている出来事や状況のことであろう。多くの学問は、出来事や状況を構成する要素や、それがともなう数量を明らかにする。しかし経験科学は出来事の出来事性や状況の切迫そのものは言葉にはしない。つまりリアルさについて直截語る方法を、ほとんどの方法論は持っていない（それを行うのはむしろフィクションであり芸術である）。もちろん医療現場を研究する場合と、芸術の現場や他の現場を研究する場合では、それぞれにとってのリアルなものの位置づけと意味付けは変化するであろう。ともあれ、芸術が担ってきた、とりわけ物語が担ってきたリアルなものを捉える作業を、構造化された学問のなかで試みるのが現象学的な質的研究である。

私の研究から例の一つ挙げる。私がインタビューをとったある ICU 勤務の看護師は、次のような看取りの場面を語った（村上 2018a）。突然のくも膜下出血で倒れた夫のもとに妻が遠方から駆けつけてきた場面である。夫は意識がないまま数週間後に死を迎えることになった。妻が夜中の病棟の暗い廊下で座り込むところに、看護師の比田井さんが通りかかり、ここから死にいたるまでの期間付き添うことになる。妻ははじめは途方に暮れていたわけだが、まず比田井さんは幸せだった時代の夫婦を思い出してもらおう。次に、彼女は「旦那さん、今、何て言うと思います？」と尋ねる。

比田井 奥さんがその前に、「やっぱり旦那さんがいないと、生きていけない」というふうなこととかおっしゃっていて、そんなふうな状況が、ちょっと心の準備も必要だし。で、奥さんとそこのお部屋で、旦那さんも囲んで話をしてる中で、奥さんと話して、「旦那さん、今、何て言うと思います？」とか、そんなふうな言葉がけをして、「しっかりするようになって多分、言うと思います」とか、そんな話をしてる中で、で、奥さんが、〔旦那さんが〕いなくなった後のような言葉を発したんですよ。だから、ちょっと準備ができてきてるなと思ったので、「こうやって背中に手入れて、ぎゅって抱き締めたりできるんですよ」と言って。そんなふうなのしてもらって、ふって患者さん見たときに笑ってたんですよ。（村上 2018a）

このようにして記憶と想像をたよりにして妻を夫へとつなぎ直していこうとする。死が間近に近づいたときに、比田井さんは妻に夫の体を抱きしめてもらう。記憶と想像だけでなく、身体でつながりを回復しようとしたのである。コミュニケーションが不可能になった夫婦のあいだを、比田井さんはあらゆる可能なチャンネルでつなぎ直そうとする。このとき意識がない夫が「笑う」。幻覚かもしれないが、こうしてケアが肯定された

と比田井さんは感じている。

比田井さんは、コミュニケーションが不可能になった夫妻をあらゆるチャンネルでつなぎなおし、それに応答するかのように意識のない夫が「笑う」。このような場面のリアリティは事物の客観性とは別のものである。私がリアルなものと呼ぶのは、例えばこのような場面で起きていることである。このような場面のリアリティは要素を抽出して数値化する方法論によっては扱いにくい。そして現象学はこのような場面で生きてくる。そこでリアルな世界との接続の回復について次節で考えていきたい。

2. 質的研究についての哲学

#なぜ質的研究は現象学を必要としたのか

さて次に、質的研究の方から哲学とりわけ現象学の意味を考えてみたい。統計を用いて数量化する量的研究においては、実践者や当事者が大事にしていたものが削ぎ落とされてしまうという実感が、質的研究を生み出したのではないかと思われる。たとえばウヴェ・フリックは次のように書いている。

このように数量化が原則として行われてきた〔量的〕研究を総括してみると、むしろ否定的な結論が下される。〔…〕彼ら〔ボンスとハルトマン〕が明らかにしたのは、社会科学の分野で得られた研究の成果が、低い応用と接続の可能性しか持たないということである。社会調査の結果が政治の現場や日常生活に還元され活かされる道は、予想を裏切って大変狭いというのである。(Flick 2007, 翻訳 16)

このような量的研究への批判を背景として質的研究は生まれた。そのなかでもとりわけ個別事象の意味にこだわる人が、哲学へと惹きつけられている。現場で感じたことを可能な限り直截に表現するための力として、実践者たちは哲学へと惹きつけられている。哲学とは、リアルなものを言葉にするための技術であるという直観を彼らは持っている。

岸政彦によると質的研究〔質的調査〕はフィールドワーク、参与観察、生活史調査、の3種類がある(岸、石岡、丸山 2016, 15-16)。問題はデータのまとめ方である。従来の質的研究は、GTAのような抽象化の技法を取る場合に、自らがつかむ固有の真理を、自然科学のもつ数式や統計における学問的な妥当性と混同してしまったように思われる。質的研究に対して量的研究の研究者が妥当性を執拗に問うたことがこの倒錯が生まれた理由であろう。「質」はまさに「量」へと還元できないものとして考えられたのだから、「量的研究の妥当性とは異なる記述で質的研究の妥当性も図られるべきであったのに、折衷的になってしまった。私たちのグループで現象学的な質的研究へと導かれた実践者たちは、他の質的研究の方法では経験の重要な部分を取り逃がしてしまうと考えてたどり着

いたケースが多い。質的研究にとって哲学が果たす役割は、まさにリアルなものへとつなぎ止める技法としてである。ここには哲学の意味についての示唆があるように思われる。患者の苦痛にせよ実践者の配慮にせよ、統計やマニュアルにおさまらないリアルさをすくい取る技術として哲学が機能するはずだという直観は、私たち哲学研究者が見失いかけていた哲学の意味を教えてくれる。

このような事情ゆえに現象学的な質的研究には、質的研究のなかでの新しさと、哲学の歴史における新しさの二つの側面がある。まず質的研究全体のなかでの独自性を確認してみたい。もちろん現象学以外の方法論もあり、その場合は異なる特徴を持つが、以下の整理は質的研究がなぜ現象学を引き寄せたのかという問いへの答えとなる。

多元的世界と個別的な普遍

質的研究から見たときには、視線の生成としての哲学なかんづく現象学的研究は、「個別のデータが持つ意味を、その個性性にこだわって最大限引き出す」という点に大きな特徴がある⁸⁾。つねに新しい図形問題を問いていくような感覚だろうか。個別の事例が持つ超越論的な構造(杉林 2018)が、個性性を保ちつつ、統計的な妥当性とは異なる真理に到達するという主張である。一人ひとりの経験や実践の個性性のなかに、逆説的に普遍を探す試みでもある。実在するのは共通項から抜き出した一般概念ではない。他のどこにもない単独の出来事こそが本当にリアルでありかつ普遍的なものである。個別の出来事が持つリアリティは、しかしその単独性ゆえに共有できるものとなる。私たちの試みは真にリアルな実在であるところの個別の出来事や実践についてその構造を描くことで、平均値や共通項の抽出に依存した社会科学とは異なる真理を獲得する試みである。

ところでボトムアップでそのつど新たに世界の見え方を発見するということは、それぞれのデータが持つ個性性にこだわるということでもあるから、世界(の見え方)の複数性を主張することになる。哲学が質的研究と交差するとき、世界は必然的に多元的になる(James 1976)。かつての哲学者は、唯一正しい真理として自分のシステムを練り上げようとしたから、システムの多元性を主張することは哲学史のなかで特異な位置を占める主張である⁹⁾。無限に多様な世界の見え方の産出(そしてこの多様な「見え方」へと共感可能であり、接続しうるという確信)、これが現象学的な質的研究が到達した世界の豊かさでもある。

内在的記述

このとき現象学は、事象をその運動の内側に視点をおいて記述し構造化する技法という特徴を持つ¹⁰⁾。それにともなって一つひとつのデータが持つ実践の連続性、持続、展開を明らかにすることになる。そもそも「見え方」とは一人ひとりの当事者や実践者か

らの「見え方」という内側からの視点を持っている。かつての哲学は、誰もが共有するはずの世界の見え方を提示してきたが、一人ひとりちがう見え方という多元性に立ったとき、一人ひとりの実践・経験の内側から個別の異なる世界を記述するという視点が生じる。とりわけ現象学は運動の運動性を内的、微分的かつ連続的に捕まえる技法である。世界の見え方の発見が哲学だとすると、実はそのような新たな世界の見え方は、すべての人によって日常的にそのプロトタイプが生産されている。しかし哲学として鍛え上げられない限り、このプロトタイプ自身は普遍性を持つ構造として顕在化することがない(Deleuze&Guattari 1991, 43)。私たち研究者は、フィールドデータ分析によって哲学の手前にある実践場面を哲学という新たな分節へと鍛え上げるのである。私たちの帰納法はそれゆえ新たな世界の見え方を構造化し概念化する作業である。

#異なる領域をつなぐ

哲学はさまざまな学問領域を横断し、つなぐ。かつて諸学の母と呼ばれた哲学であったが、そのような位置を哲学が占めることはもはやないだろう。しかし事象の運動性をつかまえるという特徴ゆえに、現実世界のなかでは分断されているさまざまな専門領域を、運動の形のアナロジーによってつないでいく力をもっている。現象学もその点は同じである。看取りの看護と、虐待を受けた子どもへの福祉的な支援という異なる実践を横断して考えることもできるのである。諸領域を横断することと、個別性を捉えるという現象学の機能とは一見すると矛盾するように見えるかもしれないが、矛盾は表面的なものである。個別の運動の構造は、それぞれ異なると同時に、接続可能である。どのような実践や経験も、人間全員が持つ可能性であるがゆえに、実践の運動の形を取り出してアナロジーでつなげることができるのだ。あるいは運動の形をその変化においてつないでいくこともできる。このことはさまざまな実践の分野と研究領域が分断されている現在においては、なおさら積極的な意味を持つ。新たな世界の見え方は、諸領域を横断して経験を再構成するのだ。

「超越論的な運動が持つ形のアナロジー」は、他の研究技法で取り出される要素的で固定された共通項とは大きく異なる性格を持つ。というのは異質な領域を横断して一見すると(つまり経験的には)異なる事象のあいだに、共通する運動を見出すからだ¹¹⁾。項目の共通性ではなく、運動の形の共通性である。

3. 意味の幾何学

哲学書の読み方の変更

フィールドワークを重んじるからと行って、読書がおろそかになるわけではない。ただ、今の哲学系の学会での査読に通るような書物の読み方に疑義を持っているだけだ。このとき古典的な哲学者が著した書物はその価値を減らすわけではない。経験的なデータが新しい世界の見え方を教えるための呼び水として、古典が持つラディカルな視点が必要になる。リアルなものを言葉へともたらすための有力な方法として古典哲学の読書がある。世界の見え方を堅牢な概念で提示している古典は、しばしばフィールドワークデータの分析を導いてくれる。

メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』で示した世界の知覚的な分節から立ち上がる身振りの文法と看護師と意識のない患者とのコンタクト（西村 2001/2018）、ハイデガーが『存在と時間』第1篇で示した道具と意味のネットワークと看護師と医療器械の結びつき（村上 2013, ch. 3）、カントが『判断力批判』で示した構想力（想像力）の行使と想像力を超える崇高な場面における実践とがんで亡くなる子どもの看取り（村上 2013, ch. 8）、スピノザにおけるコナトゥスと暴力被害者たちのレジリエンス（村上, 2017）、これらは私たちが医療・福祉現場を読み解くのに大きな支えとなった。とはいえ、データ分析は哲学書の応用ではない。データが示す構造は不可避免的に哲学のシステムとのズレをはらむ。つまりデータ分析によってそのつど新たな世界の見え方が産出される。

哲学が提示する世界の枠組みと、フィールドワークデータの個別構造は、独特な共振の仕方をする。事例を（哲学書が提示する）一般概念へと包摂するのではない。概念と事例との間には埋めがたいずれがある。それゆえにこそ哲学のシステムは事例とぶつかるときに、具体化への道筋をはらんだ潜勢力としてたち現れる。研究者が自ら採取したデータとぶつかることで、書物はポテンシャルを更新する。事例の方は自らが潜在的にはらんでいた構造を刺激される。つまりデータを解読するための参照軸を哲学書の読解は与えてくれる。データから見えてくる構造を貫く座標軸を哲学の古典は与えてくれる。「世界という書物」（デカルト）を読むためにこそ古典は必要になる。そもそも哲学が持つ概念とその布置が作る構造の力こそが、質的研究に「世界の見え方」を拓くという新たな役割を与えた。もちろん質的研究と哲学の古典は、総合されることなく弁証法的に共振し続ける。このことはまた、哲学が歴史研究のなかで次第に失ってしまったリアルな世界という指示対象を、フィールドワークデータを介して再度獲得する動きでもある。

目に見えない動きの図形を描く

哲学には哲学固有の対象である「動くもの」がある。哲学が世界の見え方を産出する

として、この見え方が見ているものは、他の学問が対象とする事物とは必ずしも同じものではない。哲学によって捉えられる運動は、事物の運動ではない。事物の運動であれば物理学で捉えられるし、事物の変成であれば化学で捉えられる。しかし質的研究で捉えるのは事物の運動や物質の変成ではないのはいままでのない。実験器具で捕捉される事象とは異なる水準の現象の記述がここでは問題になっている。事物にも数量にも還元することができない、経験がはらむ目に見えない運動を可視化し、その運動の構造を明らかにすること、これが質的研究と出会った哲学が手にした新しい役割である(Deleuze&Guattari 1991, 26)。「目には見えない動き」「物ではないものの動き」を見ること、これが哲学の営みである。見えないものはしかしリアルなものであり、決してオカルトではない。むしろこの「見えないもの」こそが私たちの経験にリアリティを与えている。私自身の研究のなかでは、受け入れがたい病や死、言葉を発することができない人とのコミュニケーションの技術や、看取りにおいて本人の希望を聞き出す技術、あるいは家族関係を組み替える技術あるいは一人の当事者を支えるために多職種の支援者が連携する動き、といったものが「見えない動き」として登場した。

そして「哲学書を読む」こともまた、まさにテキストに内在して運動を捕まえる鍛錬そのものである。少なくとも私自身はフッサールの草稿の読み方の手ほどきを受けることを通して、看護師の語りの分析を行う技術を身につけた。まさにフッサールはこのような自然現象には還元できないが目にも見えない運動を捕まえる方法として「現象学」を生み出したからだ。それゆえに哲学書を読む訓練と、データを現象学的に読むための適切な訓練とが必要になる。

ここで現象学が「現象」と呼ぶ事象が持つ特異性と射程が明らかになってくる。「現象」は自然科学において扱われる対象とは異なる水準に位置する、哲学固有の領野に出現するいわば「目に見えない」運動である。これは現象学の特権的な所有物ではないのだが、しかし現象学は「現象」という名前を与えたことでとりわけ明瞭に可視化した。「目に見えない動きがもつ形を、その運動の内側に視点をとって捕まえること」、これが私にとっての現象学のミニマムな定義である。現象学によって名付けられる前から、そもそも哲学史はつねにこのような「目に見えない運動」を対象としてきたのではないかと思われる。例えば「魂」「意味」「自己」「存在」「時間」「神」といった哲学の重要な対象はどれも目に見えない。これらは虚構なのではなく、そうとしか名付けられないが目には見えない動きを捕まえようとしている。「魂の不死」という概念は現代の私たちには突飛なものに見えるかもしれないが、往時の人にとってはそうとしか名付けられないリアルな動きであったはずだ。

自然現象へと還元することができない「運動」、経験や実践の動的な側面としての「目に見えない運動」を「意味」という名前で代表することができるとしたら、目に見えない運動を分析し、その軌跡を図形にする現象学は、「意味」という運動の「幾何学」であることになる。「意味の幾何学」、これが質的研究と出会った哲学が新たに獲得した固有

名である。

哲学が経験科学と出会ったときには、「意味」と名付けられた運動を捕まえるという点で大きな特徴が出てくるであろう。そしてここに哲学との接点においてしか捉えられないものがあるからこそ、経験科学にとっても哲学はまだ必要とされうるのだろう。

現象学的な質的研究は歴史の浅い技法であり、今後発展するのかそれとも行き詰まるのかはまだわからない。しかしもう一つポジティブな特徴として、多くの研究者による共同作業であるという特徴が挙げられる。個別の現場を丁寧に描いていく作業は、無制限に多様な現場を多くの研究者が記述することでネットワークをつないでいくことである。単独の個人技ではないがゆえに方法上の広がりをもっているのだ。「意味の幾何学」の問題集には無限に多様な問題が載っているのだ。

注

- 1) 植物状態〔遷延性意識障害〕をケアする看護師にフィールドワークした西村ユミの『語りかける身体——看護ケアの現象学』(2001/2018)を出発点として、この運動は始まった。ここまでのところ、主な書物として以下のものが刊行されている。西村ユミ『交流する身体——「ケア」を捉えなおす』(2007)、同『看護師たちの現象学—協働実践の現場から看護師たちの現象学—協働実践の現場から』(2014)、同『看護実践の語り——言葉にならない営みを言葉にする』(2016)、西村ユミ、松葉祥一『現象学的看護研究 理論と分析の実際 (カラー別冊「現象学的方法を用いたインタビューデータ分析の実際」付き)』(2014)、西村ユミ、榊原哲也編著『ケアの実践とは何か——現象学からの質的研究アプローチ』(2017)、前田泰樹、西村ユミ『遺伝学の知識と病いの語り——遺伝性疾患をこえて生きる』(2018)、村上靖彦『摘便とお花見——看護の語りの現象学』(2013)、同『仙人と妄想デートする——看護の現象学と自由の哲学』(2016)、同『母親の孤独から回復する——虐待のグループワーク実践に学ぶ』(2017)、同『在宅無限大』(2018b)。
- 2) 「哲学とはなにか」という問いを立てることができるのは、ひとが老年を迎え、具体的に語るときが到来する晩年において、おそらくほかにあるまい。」(Deleuze&Guattari 1991, 1/邦訳 7)、と、片肺を摘出し呼吸器の病に苦しむ晩年のドゥルーズ(1925-1995)とがんに罹患していた晩年のガタリ(1930-1992)は書き残した。ドゥルーズとガタリが活躍した20世紀後半のフランスにおいては、哲学という学問分野の自明性が疑われることはなかったのに対し、21世紀の日本はまったく異なる状況に置かれていることが私にこの問いを問うことを強いるのだ。
- 3) 現在日本で私と問題意識をともにしている哲学研究者は少なくないと思われる。哲学カフェ(子どもの哲学、哲学プラクティス)の流行、精神障害者の当事者研究への哲学研究者のコミットや海外における哲学教育への関心もその一つであろう。あるいは哲学系最大の学会である日本哲学会では数年に渡って哲学教育に関するワーク

ショップが組まれている（とはいえまさに『哲学』誌で採用される査読論文の保守的な内容と、このワークショップの実践的な内容の乖離こそが、日本の哲学研究の病理を如実に示している）。

- 4) 哲学化された「実践現場」という内在平面を開く概念として、「状況による触発」「想像力」「変化の触媒」「生存の支え」「ポリフォニーのポリフォニー」といった概念を私はこれまで看護の研究において産出してきた。この平面のなかで実践者はドゥルーズ&ガタリが概念的人物と呼んだものに変容する。
- 5) ドゥルーズ&ガタリによるならば、概念で構造化された内在平面を提示する哲学に対して、芸術は、（世界の見え方を反映する）知覚態として作品を提示するというであろうが、さしあたりここではその違いにはこだわらない。
- 6) もちろんアインシュタインが相対性理論を発表したときのインパクトのように、他の学問領域においても同じことは起きうるが、むしろこのときはアインシュタインもまた「哲学者」としての資格を与えられたと言える（それゆえに『持続と同時性』でのベルクソンは、哲学的な時間論として相対性理論を正面から検討した）。
- 7) このことは同時に、哲学によって切り取られることで始めてリアルな世界はそのようなものとして存在するようになるということでもあろう (Deleuze&Guattari 1991, 4)。言いかえると、リアルなものとは自明のものではなく、哲学によってその土壌として産出されるものである。

このとき出発点となるのは帰納としての哲学という視点であろう。今まで哲学と諸科学が交流するときの哲学の役割は、トップダウンで抽象的な理念を提供するという演繹的なものだった。例えばヴェントが心理学実験室を創設したのも、実は彼が抽象的に構想した人間学に対して経験的なエヴィデンスを与えるためであり、出発点は抽象的な人間学概念であったと言われる（高橋 2017）。実験心理学の機能的な手続きは、演繹的な哲学を補完するために生まれたのだった。あるいはラカンがデカルト、カント、ヘーゲルといった哲学者を参照するときには、その抽象的な概念の枠組みに助けを借りたのだった。つまり世界観の大枠を借りてきて、個別の具体的なデータを理解するためのものさしとして哲学を使うのである。

これに対して質的研究と哲学が手を組んだときには、それぞれのデータから出発して新たな構造を見出すという帰納主義的な働き方そのものに哲学が貢献することになる。つまり先入観を排してデータと向き合うことで、発見的にボトムアップしながら世界の見え方を新たに発見しようとするのだ。つまり現象学的な質的研究において、哲学は経験科学の探求のプロセスそのものに組み込まれることになる。

- 8) 単独の出来事をそのまま普遍へともたらすことを、フッサールは類型 *Typus* と呼んだ。そして私は形相的還元を、個別から普遍を導き出す方法論だと考えている。
- 9) いうなれば、スピノザ的な世界の一元論とライプニッツ的な多数世界論を並立させる。「複数の世界が並行して唯一のこの世界のなかで共存する」という風に現象学的な質

的研究は考える。ライプニッツの最善世界説は、最も多様な可能性を持つ世界を神が最善の世界として選びとったという主張であるから、私たちにとっても違和感がない。

- 10) ただし現象学以外の内側から見て取る道もある。「事象の運動の内側」は、人間の経験に限られない。カヴァイエスの数学の哲学や技術や生命体を論じるシモンドンの個体化の哲学がそうであるように、人間がかかわらない事象を、しかし統計にたよらず内在的に思考する道がある。
- 11) まさにドゥルーズ&ガタリが『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』で行った多彩な引用は、多領域を横断して共通の運動を見出す作業であった。

引用文献

現象学的な質的研究に関する文献

- 前田泰樹、西村ユミ『遺伝学の知識と病いの語り——遺伝性疾患をこえて生きる』(2018)
- 村上靖彦(2013), 『摘便とお花見 看護の語りの現象学』, 医学書院
- 村上靖彦(2015a), 「現象学的な質的研究の方法論」, 『看護研究』, vol. 48(6)
- 村上靖彦(2015b), 「現象学的な質的研究の多様性」, 『看護研究』, vol. 48(6)
- 村上靖彦(2016a), 『仙人と妄想デートする 看護の現象学と自由の哲学』, 人文書院
- 村上靖彦(2016b), 「インタビュー分析の言語学的基盤、個別者の学としての現象学」, 『看護研究』, vol. 49(4), pp. 316-323,
- 村上靖彦(2017a), 『母親の孤独から回復する——虐待のグループワーク実践に学ぶ』, 講談社
- 村上靖彦(2017b), 「経験の流れを内側から捉える知 現象学と他の方法はいかにして補い合うのか」, 『看護研究』 50(4)
- 村上靖彦(2018a), 「想像を超えたところからやってくる出来事がもつ力をうけとめる 急性・重症患者看護専門看護師 比田井理恵さん」, 『看護研究』 51(3)
- 村上靖彦(2018b), 『在宅無限大』, 医学書院
- 西村ユミ(2001/2018), 『語りかける身体』, 講談社学術文庫
- 西村ユミ(2007), 『交流する身体——「ケア」を捉えなおす』, NHK ブックス
- 西村ユミ(2014), 『看護師たちの現象学—協働実践の現場から看護師たちの現象学—協働実践の現場から』, 青土社
- 西村ユミ(2016), 『看護実践の語り——言葉にならない営みを言葉にする』, 新曜社
- 西村ユミ, 松葉祥一(2014), 『現象学的看護研究 理論と分析の実際(カラー別冊「現象学的方法を用いたインタビューデータ分析の実際」付き)』, 医学書院
- 西村ユミ, 榎原哲也編著(2017), 『ケアの実践とは何か——現象学からの質的研究アプローチ』, ナカニシヤ出版

その他の文献

- Descartes, R. (1963). *Œuvres philosophiques, tome I (1618-1637)*. Paris: Garnier.
- Descartes, R. (1967). *Œuvres philosophiques, tome II (1638-1642)*. Paris: Garnier.
- デカルト (1967), 『方法序説』, 落合太郎訳, 岩波文庫
- Deleuze, G. & Guattari, F. (1990). *Qu' est-ce que la philosophie?*. Paris: Minuit.
- Flick, U. (2007). *Qualitative Sozialforschung*. Hamburg: Rowohlt Verlag. (ウヴェ・フリック, 『新版 質的研究入門 〈人間の科学〉のための方法論』, 小田博志監訳, 春秋社, 2011))
- Grazer, B.&Strauss, A. (1967), *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. London: New Brunswick. (バーニー・G. グレイザー, アンセルム・L. ストラウス, 『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』, 後藤 隆, 水野 節夫, 大出春江 訳, 1996)
- James, W. (1976), *Essays in Radical Empirism. The Works of William James*. Cambridge, Harvard Univ. Press. (ウィリアム・ジェイムズ 『純粹経験の哲学』, 伊藤邦武訳, 岩波文庫 2003)
- 岸政彦, 石岡丈昇、丸山里美 (2017), 『質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学』, 有斐閣
- 高橋滯子 (1999/2016), 『心の科学史 西洋心理学の背景と実験心理学の誕生』, 講談社学術文庫

Philosophy and qualitative research – The role and status of phenomenological qualitative research

Yasuhiko MURAKAMI

Phenomenological qualitative research is a new movement in the Japanese philosophical milieu. When applied to the analysis of empirical data, phenomenology becomes a method to analyze the *dynamics* of a caregiver's practice or patient's experience *from inside* their point of view. In phenomenological qualitative research, the investigator examines each datum (interview or observation) as a whole and describes the structure of an individual professional's practice. This clarifies the uniqueness and value of each practice, which is not reducible to standardized care. Because each caregiver and each patient has their own experience and style, the detailed examination of individual cases can fill in gaps left by larger-scale quantitative research. Such phenomenological analysis of an individual case gives embodied meanings to the general concepts offered by other methods.

In phenomenological qualitative research, the relationship between the researcher and the classics changes radically. The classical texts shed light on empirical data and help researchers to understand the dynamics of the data.